

120. 昭和58年度滋賀県下における発掘調査の紹介

その1

本年度も県下における緊急調査はきわめて多く、バイパス等の道路建設やほ場整備事業、宅地造成、琵琶湖総合開発などに伴う発掘調査は200件を優に越えようか。こうした調査結果は報告書として刊行して一般に供することになるのだが、調査後、図面や出土遺物を整理・観察し、研究したうえで原稿を執筆して編集するという作業は現地での調査の数倍の時間と忍耐を要する。このため、その内容が公開されるまでにはどうしてもかなり時間の経過が余儀なくされる。

滋賀県埋蔵文化財センターでは県下の発掘状況を少しでも早く多くの人に知ってもらおうと年一度、年度末にスライドを用いた発表会を催している。本年度も3月10日に県下の各調査担当者に参加願って一般公開のうえ実施した。以下はその概要を発表者に簡単にまとめたものである。ここに収録できたものは昭和58年度の県下における調査のごく一部でしかないが、御利用いただければ幸いである。

1. 弥生～古墳時代の農業用水路の検出

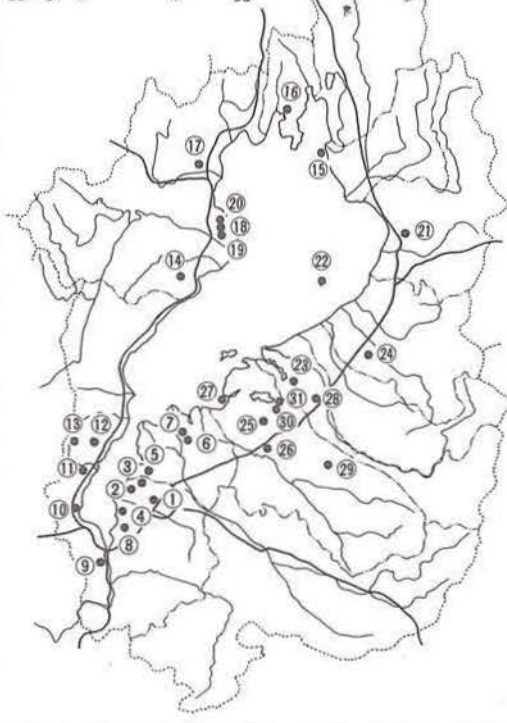
草津市西渋川 中沢遺跡

草津市西渋川から栗東町小柿付近まで広がる集落跡である。遺跡は金勝山地北縁の丘陵地帯に発する葉山川が形成した幅1kmにも満たない小扇状地の端部に位



第4号堰跡

1～7遺跡	文化財だより83(本号)	
8～15 //	//	84
16～24 //	//	85
25～31 //	//	86



遺跡位置図 位置図の番号は本文と同じです。

置し、低平な後背湿地に臨んでいる。これまで未調査のため、その実態は定かでなかったが、昭和58年9月～12月の間、西渋川一丁目の研究所敷地内ではじめての本格的な発掘調査を敢行したところ、弥生時代～平安時代の膨大な遺物のほか、水路跡、溝跡、堰跡、護岸杭列、井戸跡、掘立柱建物跡など多数の遺構の発見があった。

これらのうち注目されるのは約2000㎡の調査区内の東から西へ走る幅10mを越える基幹水路2本と、さらにこの基幹水路と合流もしくは分岐する人工的に掘削された多数の小溝である。そして、上記基幹水路と小溝の交点付近から計4基の堰跡を発見したが、それは矢板列を前後数列に打込むいわゆる「直立型堰」と呼ばれるものと直径12～13cmの丸太杭列に横木を組み合わせた「シガラミ」状を呈す二つの形態のものが認め

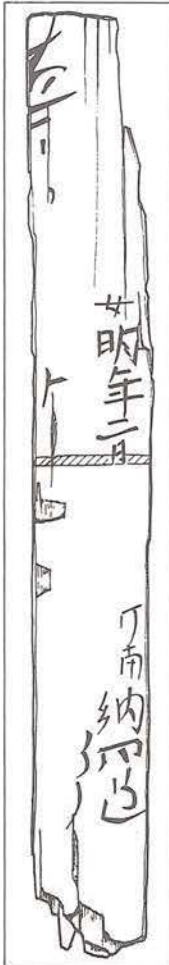
られた。また堰跡とは別に、各水路または小溝には護岸用と考えられる杭列の遺存も認められた。よって、これらの水路および小溝は、調査地近くに存在する水田跡への導水を担った農業用水路として統禦、掘削されたものと思われると同時に、堰跡などはこれら水路の人為的な管理と活用の痕跡を如実に物語る遺構と言えるであろう。

さて、上記の水路跡からは弥生時代前期～古墳時代後期までの長期間にわたる土器の出土が見られたが、最も量的に多いのは畿内V様式に比定されるものおよび庄内または布留併行の古式土師器である。このほか、本遺構からは琴状木製品、着柄鋤、鍬、腰掛、槽、杓、杵、陽物形木製品など、先史農業村落の生産から衣食住および祭祀に関わる多種多量な木製品の出土も伴った。

(草津市教育委員会 別所健二)

2. 平安末期の「納所」木簡を出土

草津市北大萱町字高谷墓ノ町 北大萱遺跡



木簡実測図

当該地付近は、以前に実施された分布調査により、多量の土師器・須恵器の散布が認められ、古墳時代を中心とする時期の遺跡として知られていた。

昭和58年度に当遺跡周辺においては、現場整備事業が計画されたため、事前発掘調査を実施した結果、当初予想されていた古墳時代の遺構に重複して、平安時代末から鎌倉時代の集落跡が広がっていることが確認された。後者の遺構としては、掘立柱建物群、井戸跡、および井戸からくみ上げた水を溜めると考えられる長楕円形の土塋などが検出された。このうち、長楕円形の土塋からは、多量の黒色土器・土師器とともに、「□□聖女明年二月 □可□南納所□」と墨書のある木簡が出土した。これは、年貢の納期である二月に向けての年貢米等に付けられた付札と考えられ、当時の税制の一端を測り知ることができる。ここに記載のある「納所」とは、律令制が平安末期にいたって崩壊していく過程で、それまで国衙の支配下に正規の徴税機関として存在した正倉に代わり出現する年貢米等の収納所で、荘園公領体制の完成により、中世的な徴税組織が確立するまでの短期間所在したと言われて

いる。

今回の調査では、「納所」に当然所在すると考えられる倉庫群は検出されず、「納所」の存在を裏付ける資料は木簡以外には得られなかったが、分布調査による遺物散布の中心地は、さらに北側に位置し、遺構の広がりが予想されるため、今後の解明が待たれる。

なお、「納所」は文献資料には登場するが、その実態は不明であり、今回の発見は、その解明に向けて具体的な資料を提供した貴重な成果であった。

(草津市教育委員会 藤居 朗)

3. 市内初の大規模な方形周溝墓群検出

草津市長束町字南溝畑他 南溝畑遺跡
// 上寺町字北太田他 北太田遺跡

南溝畑、北太田両遺跡は草津市北部の塚川左岸の沖積低地上に位置する。両遺跡は従来上寺遺跡として一括されていたが、現場整備事業の事前調査により方形周溝を主体とした北太田遺跡、掘立柱建物を主体とした南溝畑遺跡が一部を重複して存在していることがわかった。

北太田遺跡は上寺町字北太田を中心に東西に約 200m、南北に約 350mの広範囲にわたっており、弥生時代中期を中心とした方形周溝墓が28基以上検出されているが、まだ周辺にもかなり存在しているものと考えられる。その他、東西に流れる溝跡が3条、南北に流れる溝跡が1条、旧河道と思われる流路跡が1条検出されている。方形周溝墓は単独墓のものと、数基が連立するものの二種類が認められ、特に16号墓～22号墓(G地区)は孤状にめぐる溝から枝溝を出す形で方形周溝墓を形成しているようである。

南溝畑遺跡は字南溝畑を中心に東西約 300m、南北400m程に広がる奈良時代後期から平安時代後期にわたる大集落跡である。昭和58年度の調査では25棟以上の掘立柱建物跡が検出されているが、前年度の調査と合わせると計40棟以上確認されている。掘立柱建物群



方形周溝墓群

はその大半がN33°~37°E(真北より)の方位を有し、当該地域に遺存する栗太主条里の方位とほぼ一致することから集落形成に当たって条里に規制されていたことがわかる。また、当遺跡では、約15,000㎡におよぶ調査区の中で井戸跡と考えられる遺構が検出されおらず、あるいは、B地区(昭和57年度調査区)で検出された堺川の存在する北東方向から流れる水路跡が用水路として生活水を供給していたのではないかと考えられる。(草津市教育委員会 谷口智樹)

4. 「郡家」の墨書土器

草津市御倉町 草津川関連遺跡

草津川では、1982年11月より試掘調査を開始し、現在までに約100,000㎡を終了した。その中には、浜街道を橋梁化することから、橋脚にあたる部分についての本調査も含まれている。この中で、最南に位置するトレンチ(C地区Zトレンチ)では、約50基の土器群(意味不明)と河川跡が発見された。

これらの土器や河川の斜面から出土した土器から推定して当遺構面の時期は奈良時代の中頃から平安時代末までが考えられる。また、この河川の最下層からは弥生時代の土器片もいくつか出土している。

ところで、これらの土器の中でS-11は、奈良時代の土器溜となっていて、土師質の皿や壺、須恵質の坏身等が出土した。

土師質土器は作りが丁寧なものであり、よくバランスがとれていて、一般の農民が使用していたものとは思われない。それを裏づける様に、底部外面に墨書のある須恵質の坏身が共伴していた。

この墨書の字数は3字(「郡」・「家」・「有」)であり、「郡」と「家」を並べて書いた後、「有」を「郡」に重ねて書してある。

S-11での土器の出土状況を見ると、東半分では壺が多く、西半部では皿が多い。このことから、土器廃棄の仕方の中に何らかの積極的意識が反映されている



墨書土器



土器溜検出状況

と考えられる。

(勸遊賀県文化財保護協会 造酒 豊)

5. 古墳時代の祭祀土壇

守山市横江町 横江遺跡

昭和58年度より4年計画で実施されている横江遺跡発掘調査は県住宅供給公社による宅造に伴う事前調査である。今年度の調査は調査対象面積38,000㎡うち第1工区10,000㎡に対して行った。遺跡は現耕土・床地を除去した面で検出されている。時期は大きく古墳時代前期と中世(12世紀末~14世紀初)の2時期に限定され、いずれも集落跡である。全て同一面で検出されている。以下に今年度調査の概要を述べる。

第1調査区—古墳時代の遺構としては倉庫跡を含む掘立柱建物の多数の柱穴群や溝、土壇があり、なかでもSK-13とよんでいる土壇からは直径約1mの2段掘りの壇内より布留式土器の高坏・小型丸底壺が多数出土している。中世の遺構としては東西4間×南北3間の建物があり、北側と西側に柵を構築している。また、建物の西10mには井戸が在り、隅柱横棧縦板組の井戸枠を構築したのち新たに曲物を置いた形跡が認められた。他に一辺1mの隅丸方形をした庄内式土器の土器溜が1基ある。

第2調査区—古墳時代の遺構としては柱穴群と直径4mの大土壇があり、特にこの土壇から多数の布留式の高坏・小型丸底壺とともに有孔円板3点・縦柄3点・はずみ車・ミニチュア土器3点・用途不明木製品が出土した点が注目される。中世の遺構としては南北4間×東西2間、南北6間×東西1間以上、2間×2間の3棟の建物が検出された。また、青白磁合子片が出土した土壇墓らしきものもある。

また、現在調査中の第3調査区では布留式土器を包含する溝、柵囲・堀を持つ中世の建物と割りぬきと三段の曲物を埋設した井戸(高下駄出土)が検出された。第4・5調査区では7世紀後半の小溝、中世の建物、



第1調査区検出井戸

古墳時代の木製品を大量に含む大溝も検出されつつある。
(滋賀県教育委員会 木戸雅寿)

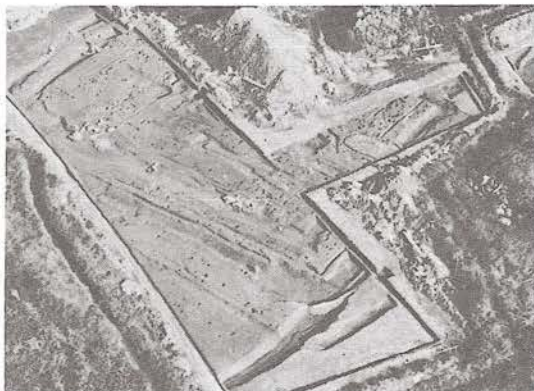
6. 室町時代の屋敷跡を検出

中主町西河原 光明寺遺跡

光明寺遺跡は、中主町西河原小学堂ノ内・セツ仮ヤを中心に所在する、平安時代～室町時代末にいたる集落跡と考えられる遺跡である。今回の第6次調査は、中主町の実施する区画整理事業に伴うもので、幅18m、延長300mの道路をはじめとする約8,400㎡を対象とした。

本来この遺跡は、遺跡名が示すように、西河原地区の氏神である二宮神社が所蔵する古図中にみえる『光明寺』という寺院名と考えられる名前より名付けられたものであるが、寺院址であるということ積極的に示す遺構・遺物の出土は特に今回もなかった。検出された主な遺構は、中主町としては非常に浅い、耕土下40cmにみられ、同一遺構面上に平安時代後半～鎌倉時代前半までの幅1m余りの狭い溝で矩形に区切られた集落跡と、南北朝～室町時代に至る二重または一部三重に堀(濠)を巡らせる複郭構造の屋敷跡(館)などである。平安時代の遺構として、幅1m、深さ0.6m前後の狭い溝で囲まれた、一単位が約500～1,000㎡余りのものが、現在までに7単位確認されている。囲い地内には、5間×3間総柱、5間×4間総柱、3間×2間、5間×4間一面廂付の掘立柱式建物や井戸、柵、土壇などがみられる。またこの内の一つには1,800㎡をこえるものがあり、他の単位と建物の構成等にも差をもっている。

室町時代の遺構は、幅3～4m、深さ1m余りの堀で囲まれた南北約97m、東西70m以上の区画内に、幅2.5～3m、深さ0.8m余りの南北約42m、東西約32mの堀で二重に矩形に囲む複郭構造の屋敷跡である。郭内には3時期前後の掘立柱式建物の建てかえがみられ、井戸、土壇墓などがみられる。現在までのところ、文



屋敷跡航空写真

献等の資料にもここに住んだ人々のことは明らかでなく、この地域でのこの遺構の役割の解明が今後の課題である。
(中主町教育委員会 徳網克己)

7. 室町期の堀に囲まれた屋敷跡

中主町吉地 吉地大寺遺跡

吉地大寺遺跡は、中主町吉地小字畳屋敷を中心とした、野洲川の形成した砂礫層の微丘陵上に位置する。

今回の調査は、個人住宅建設に伴う約620㎡の調査で、第5次調査に当たり、現集落に接する位置にある。

調査の結果、平安時代後半～近世にまでおよぶ集落跡を検出した。このうち主要な遺構は、平安時代後期の集落跡と、室町時代の堀で囲まれた屋敷跡に大別される。前者には、幅約0.5m、深さ約0.3mの建物の方向を規制する溝や土壇、それに数多く検出された曲物を重ねた井戸がある。建物については、あまりに柱穴が多く、切りあいが複雑なため、明確な建物を確認できない。柱は残存しているもので、直径が15cm余りのものが多い。特に大きな柱穴は検出していない。後者には、幅約1.8m、深さ約1.2mの堀を有する、室町時代の屋敷跡と考えられる遺構の東コーナー部分を検出した。内郭には、柱穴底に礎石を置いた掘立柱式建物(5間×3間)があり、この柱穴埋め土に多量の炭及び焼土がみられる。堀内には、多量の陶磁器・土師器が出土しており、最終的には、近世初当に自然堆積によって埋没している。発掘調査前には、調査地の北に正善寺という浄土真宗の寺があり、何等かの関係があるかも知れないと考えていたが、直接の遺構とは考えられないものであった。出土遺物には、黒色土器・土師器・灰釉陶器・須恵質陶器・信楽・常盤の陶器・青磁・白磁・漆器椀・滑石羽釜・瓦器石臼・銅銭等が出土している。

なお次年度に隣接地の調査を予定しており、遺跡のほぼ全容を知ることができるものと思われる。

(中主町教育委員会 山田謙吾)



遺構検出状況